

トマス・アキナス『「主の祈り」講解』 —翻訳のこころみ②—

Thomas Aquinas' 'In Orationem Dominicam' — Trial Translation II —

山口隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

本試訳は『「主の祈り」講解』の中間の3分の1を訳出するものである。内容は、「あなたの国が来ますように」という第2の願い、「あなたの意志が天と同じく地においても成りますように」という第3の願い、「私たちの毎日のパンを私たちに今日与えたまえ」という第4の願いの講解である。

底本としては、In Oratio Dominicam videlicet “Pater Noster,, Expositio, in: S. Thomae Aquinatis Doctoris Angeli Opuscula Theologica, vol.II., De Re Spirituali, cura et studio P. Fr. Raymundi M. Spiazzi O. P., Marietti, 1954, pp.221-225を用いた。マリエッティ版の『神学小品集』第2巻は、収録する全著作の節に通し番号を振っており、翻訳中の節番号は1051番から1079番である。

なお、文中に多数存在する聖書からの引用に関し、書名の和訳は新共同訳に拠ったが、『詩編』の編番号は文中ではヴルガタ訳の番号で示されているので、〔 〕内に新共同訳での編番号を記載した。

なお、この翻訳は訳者の知るかぎり本邦初訳である。

Key Words : トマス・アキナス, 祈り, 主の祈り

願い2

あなたの国が来ますように

1051 すでに言われたように、聖霊は私たちが、正しく愛し、欲し、願うようにする。そして、私たちのうちに最初に恐れを生じさせる。これによって、私たちは、神の名が聖とされることを求めるのである。もう1つの賜物が、敬虔の賜物である。それも本来の意味での敬虔であり、甘美で、父と、悲惨のうちに置かれている人すべてにささげられている情感である。それゆえに、神は私たちの父であるので、私たちは、彼を畏敬し、恐れるだけでなく、彼に対して、甘美で敬虔な情感をも持たねばならない。そして、このような情感こそが、私たちに、神の国が到来するよう願わせる。「私たちは敬虔に、正しくこの世を生きる。至福なる望みと、神の大いなる栄光の到来とを待ち望む者として」(『テトスへの手紙』2章12-13節)。

1052 そして、こう問うことができる。神の国は常にあり続けてきた。ならばどうして、それが来ることを願うのか。

それゆえに、こう言わなければならない。これは三重の意味で理解することができる。

A) 第一に、時には、王は王国への権利すなわち支配権を有しているだけであって、決して王国そのものへの支配は宣言されていないということがある。王国の人々がかれに決して臣従していないがために、それゆえに、彼〔神〕の国と支配とは、その国の人々が彼〔神〕に臣従した時に初めて、明らかになるだろう。

また、神は、彼自身とその自然本性によって、すべてのものの主である。そして、キリストは、それゆえに神は、またそれゆえに人間は、すべてのものの主であることを、神から与えられて得ている。「〔神は〕権能と名誉と王国とを彼〔キリスト〕に与えた」。それゆえに、彼〔キリスト〕に対してはすべてのものが臣従してはならない。このようなことは決して起こらず、終末に起きるだろうことである。「あの方〔キリスト〕は必然的に王として君臨する。すべての敵をその足元に置くことまでするだろう」(『コリントの信徒への手紙 一』15章25節)。そしてそれゆえ、私たちは願って言う。「あなたの国が来ますように」。

1053 そして、このことは3通りの形で起こる。すなわち、義人が立ち返ること、罪人が罰せられること、死が滅ぼされることという形で。

すなわち、人々は、2通りの仕方でもキリストに臣従する。すなわち、ある場合には、当人の意志によって、ある場合には意思に反して。すなわち、神の意志は、完全に満たされてあるのが必然であるほどに力あり、かつ神は、すべてのものがキリストに臣従することを欲しているのであるから。また2つのうちのもう一方は、必然的なものであろう。すなわち、ある場合には人間は彼の掟に関して彼に臣従することで、彼の意志を実行する。そしてこのことが〔人間を〕義人にする。ある場合には、神はすべてのものについて、彼らを罰することでその意志を実行する。そしてこのことを〔神は〕、罪人と彼の敵に対してなす。そして、このことは世界の終わりにあるだろう。「さらに私はあなたの敵をあなたの足を置く台として置くことまでするだろう」(『詩編』第109〔110〕編1節)。そしてそれゆえ、聖なる者たちに与えられることを求めるべきものこそ、神の国が到来することであり、すなわち、自分たちが彼〔神〕にまったく臣従することである。しかし、〔これは〕罪人たちにとっては恐るべきことである。〔彼らにとって〕神の国が到来するよう求めることは、神の意志によって罰に服することを求めることに他ならないからである。「主の日を欲する者どもに災いあれ」(『アモス書』5章18節)。

しかし、また、このことによって死も滅ぼされる。なぜなら、キリストは命であるので、彼の国に死は、それが生の反対であるがゆえに存在し得ないからである。それゆえに「そして最後に滅ぼされる敵は死である」と言われるのだ(『コリントの信徒への手紙 一』15章26節)。そして、このことは復活の時に起きるだろう。「〔神は〕私たちの謙遜〔であるべき卑しさ〕の体を作り直し、彼の明るさの体と同じ形にするだろう」。

1054 B) 第二には、天の国は樂園の栄光と言われる。これは決して驚くべきことではない。すなわち、国は統治に他ならないと言われている。そして、最良の統治があるのは、統治者の意志に反するものが何も見出されないところである。そして、神の意志するものとは人間の救

いである。というのは〔神は〕人間が救われるものになることを欲しているからだ。またこのことは、特に樂園でこそ起こる。そこには人間の救いと対立するものは何一つないだろう。「彼〔神〕の国から躓きの石をすべて取り除かれるだろう」（『マタイによる福音』13章41節）。しかし、この世には、人間の救いに反する多くのものがある。それゆえに、私たちが「あなたの国が来ますように」と願う時、私たちが祈っているのは、私たちが天の国と樂園の栄光に与かる者となることである。

1055 国とは、3つのことのゆえに、まさに欲すべきものなのである。

第一には、そのうちにある最高の正義のゆえに〔欲すべきものである〕。「あなたの民はみな正義である」。すなわち、ここ〔この世〕では悪しき人々が善なる人々と入り交じっているが、かしこ〔神の国〕では悪しき人はなく、罪人もいないからである。

1056 また同じく、最も完全な自由のゆえにも、〔国とは欲すべきものである〕。すなわち、ここ〔この世〕には自由はないが、どのような自由であれ、すべての人は自然本性的にそれを欲している。そしてかしこ〔天の国〕にて、すべての奴隷状態に対するあらゆる自由があるだろう。「まさに被造物が消滅から自由にされるだろう」（『ローマの信徒への手紙』8章21節）。そして、そこ〔天の国〕にはすべての自由な人々がいるだけでなく、王たちがいるだろう。「あなたは、私たちを私の神に対して王国とした」（『ヨハネの黙示』5章10節）。

以上のようになる理由と言うのは、すべての人が神と同じ方の意志に属するようになり、神は聖人たちが欲するものを何であれ欲し、聖人たちも神が欲しているだろうことを何であれ欲する。それゆえに、神の意志と共に、彼ら〔聖人たち〕の意志はあるようになる。そして、それゆえに、すべての人は君臨する。すべての人の意志がそうなる〔神の意志と共にあるようになる〕からである。そして、主はすべての人の王冠となるだろう。「かの日、主は、群れの者たちの栄光の冠となり、彼の民の残りにとって大きな喜びが絡みつくだろう」（『イザヤ書』28章5節）。

1057 また同じく、驚くべき豊かさのゆえに〔国は欲すべきものである〕。「神よ、あなたなしには目は見なかったのだ、あなたが、あなたに期待している者たちに対して用意したものを」（『イザヤ書』64章4節）。「善なるものであなたの欲を満たす者」（『詩編』102〔103〕編5節）。

注目されたいのは、人間はすべてのものを、神においてのみ、世において求められるものすべてよりも、より卓越し、より完全であるものとして見出すだろうということである、あなたが快樂を求めるのなら、あなたは神において最高の快樂を見出すだろう。富を求めるのなら、そこ〔神〕に、それゆえに富がある、あらゆる充足を見出すだろう。そして他の事柄についても同様であろう。アウグスティヌスは『告白』でこう言っている。「靈魂が、あなたから離れて姦淫の罪を犯す時、あなたの外にあるものを求めているのだが、それら純粋なものとしては見出されない。あなたのもとに帰るのでなければ」。

1058 C) 第三には、時として、この世では罪が君臨することがある。そしてこれは、人間が常に罪の欲求に従い、実行する準備ができていた時のことである。使徒〔パウロ〕は言う。「だから、あなたたちの死すべき肉体のうちでは、罪を治めることができない」（『ローマの教会へ

の手紙』6章12節). そして神があなたの心の中で君臨するのではありません。「シオンよ、あなたの神が君臨するだろう」(『イザヤ書』7章7節). そして、これは、〔人間が〕神に服従し、そのすべての掟に従うよう準備できている時である。そして、私たちは、国が来るように願ひ、私たちのうちで罪が君臨するのではなく、神が君臨するよう祈るのである。

1059 そして、この願ひによって私たちは、至福に至るのである。このことについてはこう言われている。「柔和な者は至福である」(『マタイによる福音』5章4節). すなわち、最初の解釈のように、だから人間は、神がすべてのものの主であることを欲し、自身に加えられた不正に自ら復讐せず、それ〔不正〕を神に任せるのである。すなわち、あなたが自ら復讐することがあったなら、それは、彼〔神〕の国が到来するのを求めないことになっただろう。しかしながら、2番目の解釈のように、あなたが彼〔神〕の国を、すなわち楽園の栄光を待ち望むなら、世のものを減ぼすかどうか気にする必要はない。同じく、3番目の解釈のように、あなたが、神が、そしてキリストがあなたのうちに君臨することを願うなら、彼〔キリスト〕は最も柔和な方だったので、あなたもまた柔和であらねばならない。「あなたたちは私から、私が柔和であるということを知りなさい」(『マタイによる福音』11章29節)。「あなたたちの財産が奪われることを、あなたたちは喜びと共に受け入れてきた」(『ヘブライ人への手紙』5章34節)。

願ひ3

あなたの意志が天と同じく地においても成りますように

1060 聖霊が私たちのうちで成す3つ目の賜物は、知恵の賜物と言われている。なぜなら、聖霊は自ら、善なる者たちのうち、恐れと敬虔さの、すなわち、既に言われたように主に対する甘美な情感の賜物を成すだけでなく、人間を知恵ある者とする。そして、このことをダヴィドは願ひ、こう言った。「善と訓練と知恵を私に教えたまえ」(『詩編』118〔119〕編66節)。そして、これこそ、人間がそれによって善く生きる知恵であり、これを私たちに教えてきたのが聖霊である。

知識と知恵のゆえに〔人々が〕なすもののうち、他のものに比して最も力ある知恵とは、人間はその感性に依存するべきではないということである。「あなたはあなたの思慮に依存してはならない」(『箴言』3章5節)。すなわち、その感性によって推測し、他のものを信じず、己だけを信じているというような人たちは、常に、愚かと見なされ、断じられるものだ。「あなたは、自ら賢いと思っている人を見たことがあるか。彼よりも、愚か者のほうが希望があるだろう」(『箴言』26章12節)。

また、人間がその感性に信を置くべきではないということは、謙遜によるものである。というのは、謙遜があるところにはまた知恵もあるからである。傲慢なものは、自分自身にあまりに信を置いていると言われるように。

1061 それゆえに、聖霊は、知恵の賜物を通して教えるのである。すなわち、私たちは自分た

ちの意志を行なうのではなく、神の意志を行なうべきであると。そして、この賜物ゆえに、私たちは神に、その意志が天と同じく地においても成りますようにと願うのである。そして、このことのうちに、知恵の賜物は顕れる。それゆえに、神に対しては「あなたの意思が成りますように」と言われるのは、1人の弱い人がいて、医者からなんらかのことを得ようと欲するなら、それは〔彼が〕端的に欲しているのではなく、医者の意志によるのであるということと同じ意味である。他のものを、彼自身の意志によってのみ欲したとするなら、愚かであろう。かくて、私たちが神に対して願うべきは、私たちに關して彼〔神〕の意志が成るようにということ、すなわち、彼〔神〕の意思が私たちのうちで完成されるようにということだけである。

なぜなら、その時、人間の心は正しくなるからである。すなわち、神の意志に一致する時に、これをキリストは行なったのだ。「私が天から下ったのは、私の意志をなすためではなく、私を遣わした方の意志をなすためである」(『ヨハネによる福音』6章38節)。すなわち、キリストは、神としては、御父と同一の意志を持ち、人としては、御父と異なる意志を有しており、そして、後者〔御父と異なる意志〕によって自分は自分の意志をなすのではなく、御父の意志をなすのだと言っているのであり、そして、私たちにも「あなたの意志が成りますように」と祈り願うことを教えているのである。

1062 ところで、言われているのはどういう意味か。「〔神は〕欲したことは何であれすべてしてきたのではないか」と言われているのではないか(『詩編』113章3節)。「神が」天において欲することをすべて、地においてもなすというのであれば、「あなたの意志が天と同じく地においても成りますように」と〔願って〕言うことに、何の意味があるのか。

1063 このことについて知るべきことは、神は私たちについて3つのことを欲するという、そして私たちは、この3つが実現されることを願うということである。

A) 神が私たちについて欲する第一のことは、私たちが永遠の命を持つことである。誰であれ、何かを何らかの目的のためになすなら、前者〔何か〕について、それをすることそのためであるところのそれ〔目的〕を欲している。そして、神は人間を作ったが、なんのためでもなく作ったわけではない。『詩編』で言われているように「あなたはすべての人の子を決して空しく作られたのではない」からである(『詩編』88〔89〕編48節)。それゆえに、〔神が〕人間を作られたのは何かのためだったことになるが、それは快樂のためではない。野獣もまたそれを味わうからである。そうではなくて、〔人間が〕永遠の命を持つためである。それゆえに、主は、人間が永遠の命を持つことを欲するということになる。

1064 しかし、救われると言われるのは、なんらかのことによって、それがそのためになされたところのもの〔目的〕が達成される時である。しかしながら、達成されないなら、そのものは滅びると言われる。ところで、神は永遠の生のために人間を作った。それゆえに、永遠の命が達成される時、〔人間は〕救われるのであり、そしてこのことを欲しているのが主である。「私たちが遣わされた御父の意志とは、御子を見て、彼を信じる者がみな永遠の命を有することである」(『ヨハネによる福音』6章40節)。

この意志は、天使たちと、天国にいる聖人たちに関しては満たされている。彼らは神を見、認識し、彼〔神〕を享受しているからである。しかし、私たちは、神の意志が天にある聖人たちに関して満たされているように、地にある私たちに関しても満たされることを欲し、こう祈る時にこのことを願っているのである。「あなたの意志が成りますように」、地にある私たちに関しても、天にある聖人たちに関してと同じく。

1065 B) 私たちに関する神の別の意志とは、私たちがその〔神の〕掟を守ることである。誰かが何かを欲する時、彼はそのもの、欲するものだけを欲しているのではなく、それへと至る〔それを達成することにつながる〕すべてのものを欲している。医者が健康を達成するために、食事療法や薬、その他その類のことをもまた欲するように。

ところで神は、私たちが永遠の命を有するよう欲している。「あなたが、命へと歩み入ることを欲しているなら、掟を守れ」(『マタイによる福音』19章17節)。「あなたたちの理性的な従順は」「あなたが神の意志が善であると証しするためには、非常に喜ばしい、完全なものである」(『ローマの信徒への手紙』12章1節、2節)。「神の意思が」善なのは、それが有用であるがゆえのことである。「我こそ、あなたに有用なことを教える主である」(『イザヤ書』163章17節)。「また、神の意志は」愛する者にとって非常に喜ばしい。たとえ、他の者たちにとっては好意的〔な意志〕でないとしても、それでも愛するものにとっては快いものである。「光は義なる者に対して、喜びは心の正しい者たちに対して生じる」(『詩編』96〔97〕編11節)。「神の意志は」完全であり、それは誠実であるがゆえのことである。「あなたたちは完全であれ、あなたたちの天の御父も完全であるように」(『マタイによる福音』5章48節)。

また、このような神の意志は義人たちのうちでは成っても、罪人のうちには決して成らない。そして、義人たちは、天〔という語〕で表されており、罪人たちは、地〔という語〕で表されている。だから、私たちは、神の意志が「地にも」すなわち罪人のうちにも、「天と同じく」すなわち義人たちのうちと同じく成るようにと願うのである。

1066 そして注目すべきは、ここで語り方に由来し、私たちに教えが与えられるということである。すなわち〔この祈りでは〕、なしたまえ、と言われているのではなく、私たちがなしますように、と言われているのでもなく、「あなたの意志が成りますように」と言う。というのは、永遠の命には2つのこと、すなわち神の恵みと人間の意志とが必要だからである。そして、たとえ神が人間を、人間なしに作られたのであっても、それでも〔神は〕彼〔人間〕を彼〔人間〕抜きで義となしたまわないのである。アウグスティヌスによれば、「あなたをあなたなしで創造した方は、あなたをあなた抜きでは義となしたまわないだろう」、なぜなら、〔神は〕人間が共に働くことを欲されているからである(トマス・アキナス『ヨハネ福音書』註解)。「あなたたちは私に向き直れ。そして私もあなたたちに向き直ろう」(『ゼカリヤ書』1章3節)。使徒〔パウロ〕によれば、「神の恵みによって、私は、私がそれであるところのものである。そして彼〔神〕の恵みによって私のうちには空しいものはなかったのである」(『コリントの教会への手紙 一』15章10節)。したがって、あなたはあなたに関することを先取りするべきでも、神の恵みに関す

ることを確信するべきでもない。また諦めてもいけない。そうではなくて、あなたの熱意を向けるべきで。そしてそれゆえに、〔この祈りでは〕私たちがなしますように、とは言わない。神の恵みが何もなさないかのように思われぬようにするためである。また、なしたまえ、とも言わない。私たちの意志と努力がなにもしないかのように思われぬようにするためである。そうではなくてこう言う。「成りますように」、神の恵みによって、私たちが熱意と努力を向けるのとともに。

1067 C) 神が私たちについて欲する第三のものは、人間が、最初の人間がそのうちで造られた状態および尊厳、すなわち霊と靈魂とが肉と感性からの反抗を一切経験しなかったという状態に作り直されることである。

すなわち、靈魂が神に服従している限り、肉も靈魂に服従し、死という、あるいは弱さという、他の受苦という消滅を一切経験しない。しかし、このことゆえに、霊および靈魂は、神と肉との仲立ちであり、罪によって神に逆らい、その時、体が靈魂に逆らい、その時、死および弱さ、そして、感性の霊に対する継続的な反抗を経験し始める。「私の手足に他の法、私の心の法に逆らう法を私は見る」(『ローマの信徒への手紙』7章23節)。そして「肉は霊に逆らって欲望を抱き、霊は肉に逆らって欲する」(『ガラテアの信徒への手紙』5章17節)。かくて、肉と霊との間に継続的な戦いがあり、人間は罪によって継続的により悪くなる。それゆえに、神の意志とは、人間は最初の状態、すなわち肉のうちに霊に反するものがなにもない状態へと作り直されることである。「あなたたちの聖化こそ、神の意志である」(『テサロニケの信徒への手紙 一』4章3節)。

1068 ところで、神のこの意志は、この生では満たし得ず、聖人の復活の際に、栄光を与えられた体が復活し、消滅することのない最も高貴な体になった時に、満たされるだろう。「卑しさのうちに種まかれ、栄光のうちに立ち上がる」。しかし、神の意志は義人のうちに、靈魂に関する限りで、正義と知識と生命とによってある。そしてそれゆえ、私たちが「あなたの意志が成りますように」と言う時、肉に関してもそうなりますようにと祈っているのである。すなわち、以上のような意味で、天〔という語〕で私たちは霊を理解し、地〔という語〕で肉を理解する。すなわち、「あなたの意志が成りますように」、「地において」すなわち肉に関しても、「天において」、すなわち私たちの霊に関して正義によって成るの「と同じく」。

1069 そして、この願いによって、私たちは、悲しみの至福に到達する。「悲しむ者は至福である。彼らは慰められるだろう」。そして、これは、3つの解釈のいずれにも適う。

すなわち、最初のもの〔解釈〕によれば、私たちは永遠の命を欲している。それゆえに、この愛によって私たちは悲しみへと引き入れられる。「ああ、私にとって悲しいことだ。私の〔この世での〕居留が長く続いているのは」(『詩編』119〔120〕編5節)。そして、このような聖人たちの欲望は、激しさのあまり、そのためには、それ自体としては避けるべきものである死を〔すら〕欲するほどだ。「私たちはあえて行ない、そして、むしろ体から旅立って、現に神に向かってであろうとの善き意志を有する」(『コリントの信徒への手紙 二』5章8節)。

また、2つ目の解釈に対応しては、掟を守る人々は、悲しみのうちにある。というのは、たと

え靈魂にとって甘美であっても、それでも肉にとっては、それ〔肉〕が弱らされ続けるようなものは苦い。「行く者たちは、悲しみながら行った」、すなわち肉に関する限り、「だが、来る者たちは、大きな喜びと共に来るだろう」、すなわち靈魂に関する限り。

また、3つ目の解釈に対応しては、肉と霊との間で続く戦いから、悲しみが生じる。というのは、靈魂は、肉による赦されるもの〔赦される罪・小罪〕によってより小さい程度であれ、傷つけられないわけにはいかない。そしてそれゆえ、それが贖われるよう、〔靈魂は〕悲しみの中にある。「私は、一つ一つの夜を通して、洗うだろう」すなわち、罪の暗さを通じて、「私の寝台を」すなわち、私の良心を。そして、以上のような仕方で泣く人々が、天国に至る。そこへと私たちを至らしめるのが神である。

願い4

私たちの毎日のパンを私たちに今日与えたまえ

1070 誰かが、知識と知恵に富んでいるゆえに臆病になるというのは、しばしば目にする事だ。そしてそれゆえ、そのような人には、しなければならないことを欠かすことのないよう、心に勇気が必要となる。「疲れた人に力を与え、そうでないものたちには、勇気と強さを増すお方」（『イザヤ書』11章29節）。ところで、この勇気とは聖霊が与えるものである。「私に入ってきたのは霊だ。そして、私を私の足の上に立たせた」（『エゼキエル書』2章2節）。そして、この、聖霊の与える勇気とは、人間の心が、恐れのために、しなければならないことから退いてしまわず、そのひとがしなければならないことはすべて神から自分に任されたことだと固く信じるためのものである。そしてそれゆえ、聖霊は、このような勇気を与え、神に対してこう願うことを私たちに教える。「私たちの毎日のパンを私たちに今日与えたまえ」。それゆえに、勇気の霊と言われているのである。

1071 ところで、先行する3つの願いで、ここ、霊的な事柄が願われており、それらはここ、すなわちこの世にその端緒があるものの、永遠の生のうちで初めて完成されるということは、知っているはずだ。すなわち、私たちが、神の名が聖とされるよう願う時、私たちは、神の名が認識されることを願い、また、神の国が到来するのを願う時、永遠の生に与かる者となることを願い、また、神の意志が成るように祈る時、その意志が私たちのうちで満たされることを願うのである。これらはすべて、たとえこの世で始まって、それでも、完全に所有することは、永遠の生のうちでなければならない。そしてそれゆえ、現在の生でも完全に所有できる何かを、それがしなければならないことである限り、願わなければならない。そしてそれゆえ、聖霊は、現在の生に必要なものを教えてくださったのだということになる。これらは、ここ〔この世界〕で所有し得るものである〔つまり、この世で完成されるものである〕。これは同時に、時間的なものについてもまた、神は私たちのために配慮してくださることを示すためでもある。そして、だからこそ、「私たちの毎日のパンを私たちに今日与えたまえ」と言うのである。

1072 まず、これらの言葉で、〔聖霊は〕私たちに、時間的なものへの欲望から生じるのが慣わしとなってきた5つの罪を避けるよう教えておられる。

1つ目の罪は、人間が適度でない欲求のために、その分際を超えたものを願うということ、つまり彼にふさわしいもので満足しないということである。たとえば、衣服を欲している者が、それが兵士であるなら、兵士としての衣服をではなく、廷臣のような衣服を欲する場合のように、また司祭であるなら、司祭としての衣服でなく、司教のような衣服を欲する場合のように。そして、この悪徳は、人間を霊的なものから引き離す。彼らの欲望が時間的なものに、あまりに固着している限り。

この悪徳を、私たちに避けるよう教えられたのは主で、私たちにパンだけを、すなわち、現在のせいに、めいめいのおかれた条件に応じて必要なものだけを願うよう言われた。これ〔めいめいのおかれた条件に応じて必要なもの〕はすべて、パンの名の下に理解されている。それゆえ、〔聖霊は〕快いものを願うようには教えなかったし、また様々なものも、類まれなものも願うようには教えず、パンを、それなくしては人間の命が保ち得ないものを願うよう教えた。〔パンなくして生きられないことは〕すべての人に共通するからである。「人間の命の始めはパンと水」使徒によれば、「栄養とそれによって私たちが覆われるもの〔衣服〕を持っていれば、私たちはそれらで満足すべきである」(『テモテへの手紙 一』6章8節)。

1073 2つ目の悪徳は、ある人々が、時間的なものを獲得する時、他の人々を悩ませ、だますことである。この悪徳は、取り去られた善が回復するのが困難になるほど危険である。なぜなら、罪が捨て去られるには、アウグスティヌスの言うように、取り去られたものが回復されねばならないからである。〔聖霊は〕このような悪徳を私たちに避けるよう教え、他の人のパンではなく、私たちのパンを願うよう教えられたのである。なぜなら、略奪者たちは、自分のパンではなく、他の人のパンを食い尽くすからである。

1074 3つ目のものは、過剰な心配である。すなわち、彼らが持っているものについて決して満足することなく、常により多くのものを欲している人々である。これは、節度を欠いている。欲望は、必要性に従うよう節度を与えられなければならないからである。「あなたが、富も貧困も私に与えてくださることがありませんように。私の生活にとって、必要なものを分けてください」(『箴言』30章8節)そして、〔聖霊は〕このことを避けるよう私たちに忠告されて、こう言われた。「私たちの毎日のパンを」、すなわち一日の、あるいは一時のそれを。

1075 4つ目の悪徳は、節度のない暴食である。すなわち、一日に、多くの日に十分なほど消費することを欲する人々である。そして、このような人々は、毎日のパンを願わず、10日のそれを願う。そして、過剰に量りとっているために、すべてのものを消費してしまうということになる。「能力を欠いたまま、宴会の割り前を与える人々は、滅びるだろう」(『箴言』23章21節)。「労働者であっても飲んだくれなら、豊かにはならないだろう」(『シラ書〔集会の書〕』19章1節)。

1076 5つ目の悪徳は、感謝を忘れることである。すなわち、ある人々が富のゆえに傲慢になり、有しているものが神からのものであることを思い出さなくなる時のことで、これは極めて悪

い。私たちが持っているものは、霊的なものであれ、時間的なものであれ、神に由来するからである。「すべてはあなたのものであり、あなたの手から私たちは受け取った」(『歴代誌上』29章14節)。それゆえ、この悪徳を取り除くために、〔聖霊は〕「私たちに与えたまえ」と言い、そして「私たちのパンを」と言うのである。私たちが、私たちの者はすべて神に由来するということを知るために。

1077 また、このようなことについては、私たちの手元に1つの事例がある。すなわち、ある人が多くの富を持ちながら、それらによってなんらの有用なことも達成せず、霊的にも時間的にも呪われたことを達成するというような場合である。すなわち、ある人々が富のために滅んだという場合である。「太陽の下で私が見た、人間たちの許ではありふれているもう一つの悪がある。神が富と財産と名誉を与え、欲したものをすべて持つがゆえに、その靈魂に何もかも欠けていない人。彼に神は、彼のものを食い尽くす権能を決して与えず、他所の人がそれをむさぼり食うだろう、また「富は集積されて、その主人にとっての悪となった」(『コヘレトの言葉』6章1節、5章12節)。それゆえ、私たちは、私たちの富が私たちに、役立せられるだけあるよう願わなければならない。これを私たちは願って、こう言うのである。「私たちのパンを私たちに与えたまえ」、すなわち、富が私たちにとって役立つようにしたまえと。「彼のパンは、あの者の腹のうちで、蛇の毒となって、内にある。あの者はむさぼった富を、吐き出すだろう。そして、彼の腹から、それらを引っ張り出すのは神であろう」(『ヨブ記』20章14—15節)。

1078 もう1つの悪徳が、世の事物に関してはある。すなわち、過剰な心配というものが。すなわち、一年後におこるだろう時間的な事物について今日心配する人たちがいる。そして、これ〔この悪徳〕を有している人々は、決して安心することがない。「私たちは何を食べようか、何を飲もうか、何をしようかと心配してはならない」(『マタイによる福音』6章31節)。そしてそれゆえ、主は私たち、今日私たちに私たちのパンが与えられるよう願うことを教えておられる。すなわち、私たちに、現時点で必要なものを〔願うことを〕。

1079 さらに、2種類のパンが見出される。すなわち、秘蹟的なパンと、神の言葉のパンが。

ゆえに、私たちは、私たちの秘蹟的なパンを願う。これは、毎日、教会で告白されている。秘蹟のうちで私たちがそれを受け取るように、救いのために私たちに与えられますようにと。「私こそは、天から下った命のパンである」(『ヨハネによる福音』6章51節)。「相応しくなく飲み食いする者は、自分への裁きを飲み食らう」(『コリントの教会への手紙 一』11章29節)。

また、もう1つのパンは神の言葉である。「パンだけで人は生きるのではなく、髪の口から出るすべての言葉で人は生きる」(『マタイによる福音』4章4節)。それゆえに、私たちは、私たちにパンを与えてくださるよう願う。すなわち、彼〔神〕の言葉を。また、このことから、人間に対して、義に飢え乾くという至福が生じる。すなわち、霊的なものは、手に入れた後、なお強く欲せられるものであり、この欲望から飢えが生じるのであり、そして、飢えから永遠の命への乾きは生じるのである。